

---

# アプリコットの海

夏川 柚寿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アプリコットの海

### 【Nコード】

N4136M

### 【作者名】

夏川 柚寿

### 【あらすじ】

長くない人生。その中の密度の濃い毎日。彼らの狂い咲く青春。甘い杏と深く暗い海。

## 変わらない道と私

相変わらず眩しい。

新学年になつてもこの通学路は変わらない。

いつもこの坂道には朝陽が昇つて、その道を私がひたすら歩いてゆく。

真正面に見える太陽は、かなり眩しい。

私が今の中学に入学した頃から変わっていない。

履き慣れた白いスニーカーを見ると、少しだけ汚れが付いていた。毎日履いていれば汚れも付く。私にはあまり気にならない程度の汚れである。

「あーやーきー！おっはよーっ」

後ろから背中を叩かれた。

ああ、これも相変わらずのこと。

一つ向こうの住宅街に住む、幼なじみの真沙美だ。

「おーはよー」

不意を突かれたこともあって、私の返事は間拔けた。

色白で細身の彼女は、飾らないお転婆な笑顔を浮かべて私を見つめている。

これも、かれこれ10年は変わらない笑顔である。

真沙美は私の隣に並んで、一緒に歩き出す。

「学校とかマジ超めんどいー」

大体一日の最初に来る真沙美の台詞はこれだ。

女子ってそんな感じだから、私は別に深くは捉えない。

「うん、めんどいー」

私も同じように言った。

「ってか担任がウザ過ぎなんだもん。マジやるー」

気だるそうに担任の不満を漏らす。

別に私はウザいとは思ってないけど、今は真沙美の話を聞く。

「どこが嫌なの？」

「もう全部！いちいち熱血でさー、みんなを名前で呼ぶなんてキモいし！あと顔も！」

「ああ…まあ確かに名前では呼んで欲しくないな」

担任の森島という男は、生徒にいつも熱血直球の体育教師である。顔は色黒で濃い顔立ちで、がっしりしている。

声もいちいち大きいし初日から慣れ慣れしく話しかけるといいう、年頃の女の子には嫌悪を持たれてもしょうがない先生だ。

私のことをどうしても綺麗と名前で呼びたがり、私が一度辞めてほしいと言ったにも関わらず呼んでいる。

真沙美も同様に、「キモいから是非とも辞めて下さい」と（ストレートに）言われたのに、懲りてない。

授業もそっこのけでクラス団結とか言い出すものだから、何となくかも呆れてしまう。

「あいつほんとつざい！担任変えてほしい！」

「でもあと1年の我慢じゃないかー」

「我慢できないーっ」

地団駄を踏んで怒りだす真沙美。

朝からこんなになっちゃって、午後まで体力は持つのか？と疑問を抱きかねない。

女子には底力があるということだ。

「何であんな出来損ない人間が教師になれたのか分かんないんだけどー」

「教育委員会の陰謀かもしれないねー或いはマグレ」

「マジ教育委員会甘過ぎなんじゃない？」

こんな風にてきとーな会話をしながら交差点を渡って、閑静な住宅街から離れてゆく。

大きな道路を横切れば、我がホーム市立桜田中学校の門が見えてくる。

校門をくぐり、生徒たちの群れを通り過ぎて靴箱で靴を履き替える。

東校舎の3階の隅から2番目の教室が私のクラスである。

2年B組が私の学級。

すみかわあやき  
澄川綺貴。

これが私の名前である。

澄川と書かれた上履きを、床をトントンと蹴って履く。

今日も一日、また過ぎてゆく。

## 変わらない道と私（後書き）

初めまして、夏川柚寿です。

拙い文章ではありますが、どうぞ興味のある方はご覧ください。

誤字脱字・文の矛盾等がありましたら感想にてご指摘くださると有難いです。

## 朝のHRにて

「おはよー真沙美ー」

「あ、真沙美おはよー」

教室に入って行くと、挨拶されるのは真沙美だけのことが多い。  
というのも私は何となく女子から煙たがれる存在らしく、女子で  
特に仲が良い人なんて数人ぐらいだ。

正直女子なんてめんどくさいだけだから、クラスで一番深く関わ  
っているのはほぼ真沙美だけだ。  
席に座ってバッグを置く。

「今日も元気にやってるかい、綺貴？」

出た。こいつ。

私の隣の、ちょっとオカシナ男子。

相楽敬那。

ケイナ、なんて女の子みたいだが（多分）れっきとした男子だ。  
髪がダラダラ長くて前髪が目にかかっている。

肌が生白くて三白眼でやけに目が大きく見えるため、少し怖い。  
性格も見えた目も相まってか、とても変な奴だ。

ついでにいつの間にか私を名前で呼んでいた。（森島か！）

「君こそ、元気？」

しょうがないから答えてやると嬉しそうに笑窪を作っへらへら  
笑ってピースをつくる。

「へっ、俺に死角はないぜえ！」

語尾にwwwと付けたくなるような台詞だ。

授業中は爆睡、先生から説教の嵐、更には途中で学校を抜け出すという頂けない不良児の彼。

このクラスになった時からこの席だが、彼の奇行ぶりは正直厨二病かとも思った。

それが何故かは追々解るだろう。

「おはようみんな！！今日も良い天気だぞ！」

マジうつざい。

多分言ったのは真沙美あたりだと思う。

相変わらず暑っ苦しい笑顔に、それをさらに強調する赤いジャージを着た森島。

全てがもう熱い。

まだ5月の始まりというのに。

「なんだみんな、元気が無いぞー？こんなに気持ちが良い朝なのに！」

挨拶が返ってこなかったからか、更に声を張り上げる森島。

「モリシマは…もしかして超能力持つてるんじゃないか……？」

「は？」

突然、隣の敬那がボソツと呟いた。

何を言い出すんだ？

「どうして？チヨウノウリヨク？」

「そう……まるで皆を支配するようなあの暑苦しい声……危険だ……」

……」

「キケン？」

「あいつにはきつと悪魔が憑いてるに違いない……油断ならねえ……」

至って真面目そうに言うが、私にはさっぱりチンプンカンプンなので、放っておいた。

やっぱこいつは厨二病か。

二度も無視された森島は呼びかけても無駄なことに気付いたのか、別の話題を切り出した。

「今日の朝のHRは、みんなにアンケートを書いてもらいたいんだ」

アンケート？

森島がアンケートを配り始めた。

真沙美が森島からプリントを受け取るときのあからさまに嫌そうな顔は、言うまでもない。

「学校生活についてのアンケートだ。よく考えて答えてくれ！」配られたプリントを見ると、『学校生活についてのアンケート』と印刷されている。

どうせいつもの他愛のない悩み相談とか生活反省に違いない。めんどいー。誰かがそんなことを呟く。

「いいか、みんな。普段の生活でみんなが悩んでることがあれば書いてくれて構わないぞ。先生が出来るだけ力になるからな！」

いかにも“俺、今カッコいい！”みたいな台詞を言う森島。うわ、きつもーい。

今のは真沙美を含めた数人の女子だろう。

「この俺にこんなものは不要だ……」

敬那は早速、紙飛行機を作りだしてしまった。アンケートの質問を見てみた。

Q1・あなたは最近、学校生活はどうですか？

Q2・学校生活についての悩みはありますか？

Q3・その悩みについて具体的に書いてください。

Q4・他に悩みや不安なこと、先生に相談したいことはありますか？

Q5・その他に何かあれば書いてください。

先生から：先生はみんなの味方だ！たくさん相談してくれ！by  
森島

最後の森島コメントはさておき、まあアンケート内容自体はごく  
ありきたりなやつだ。

新学年になって、いじめや不安なことがないかどうかを確かめる  
もののようだ。

「めーんどい」

ぼやきながらてきとーに記入。

具体的ないじめもないし悩みって言うほどの悩みも無ければ、不  
安なことも無い。

落書きでもしちやおうかなんて考えてたら、HR終了のチャイム  
が鳴った。

「じゃあ、後ろから回収してくれ」

列の後ろの人がアンケート用紙を回収し始める。

「全部回収し終わったら学級委員、資料室に田中先生がいるから  
渡してきてくれ」

はい、と返事が聞こえた。

立ち上がったのは、このクラスの学級委員の白城くんだ。

白城明という生徒は、どこをとっても優等生だった。

背は高めで細身だがどこか大人びている。肌は白くて繊細で整っ  
た顔立ちをしている。

成績は常にトップか次席を誇り態度も良くて、運動神経も良いと  
いう。

面倒な委員の雑用を、いつもこなしている。

先生たちからの評価も良く、男子からも女子からも憧れられてい  
ると思う。

かくいう私も、彼に対して決して悪い印象は持っていない。

一部から煙たく思われている私にも、分け隔てなく接してきてくれることもあったような気がする。

白城くんは先生に渡された用紙を面倒がることなく受け取って資料室に行った。

「何、ボーっとしちゃってるの？」

いつの間にか目の前に真沙美がいた。

どうやら私は白城くんをボーッと眺めちゃってたらしい。

「白城くんて、あたしマジ尊敬するわー」

ちようど白城くんのことを考えていたものだから、かなり吃驚した。

「尊敬？白城くんを？」

「そう！だってあんなキモいセンサーなのにさー、嫌がりもしないで接してるなんてすごいし、ついでに面倒な仕事もちゃんとやってるし？」

担任に対しての嫌悪丸だしの台詞はともかく、真沙美の言うことにはとても納得した。

「確かに、雑用とかちゃんとやってるしね」

「でしょ？あたし絶対無理いー」

真沙美はそれだけ言って、昨日見たドラマの話を始めた。

真沙美の言葉に耳を傾けてみるが、内容は真沙美の好きな俳優についてばかりなので解らなかった。

## 優等生

キンコンカーンコン……。――

3時間目終了のチャイムが鳴った。  
みんなが一斉に鉛筆から指を離す。  
国語の授業だった。

「はい、じゃあそこまで」  
「起立。礼」

先生の合図で号令が終ると、みんなは休み時間になってがやがや始める。

しかし、今回はそうもいかない。  
4時間目は理科だ。移動教室のため、10分程度のうちに反対側の校舎に移動しなければならない。

みんながそれぞれ誰かと群がりながら移動を開始し始めた。

「綺貴、理科室行こー？」

真沙美が国語の書き取りにウンザリしたような表情で私のところへきた。

今日の国語は長い物語の一部をノートに記す作業で、慣れない鉛筆での書き取りだったため指が痛くなっていた。

「うん、今行く」

さつさと理科の教科書やノートとペンケースを持って真沙美と移動し始めようとした。

その時、ふと目に留まった光景があった。

白城くんだ。

私の隣の列の斜め後ろの席の白城くんは、何やら教科書を見ているようだ。

きつと予習か何かのつもりなのかな…と思ったが、どうやら違ふようだ。

ただ、教科書を見ている。

厳密に言えば、ある一点を凝視している。

じつと瞳を動かさず、まばたき一つせずに見つめている。どうしたのだろう。もう、移動しなければならぬのに。

既に教室には数人ほどこが残っておらず、あと数分で授業開始だった。

「もう綺麗ー？どうしたの？行かないと！」

真沙美の声で我に返り、教室から出た。

何となく気になった。白城くんのが。

理科の時間、白城くんはひとり遅れて理科室に入ってきた。

始業チャイムが鳴っている最中にだ。

理科担当の田中先生が、普段きちんと5分前には着いている優等生に怪訝そうな視線を向けた。

「どうした白城？保健室か？」

「ああすみません、先生。捜し物をしていて、遅くなりました」  
走ってきたのか、少しだけ息を切らしながら白城くんは答えた。

普段から信用されているので、先生は「そうか」とだけ言っ授業を始めた。

だけど私は、白城くんの“さがしものをしていた”と言ったのが引つかかっていた。

さっきまで教科書を一人凝視していて、それから何かを探してたのだろうか。

白城くんは普段と変わらず、授業を受けている。

私の気のせいだろうか。

「おしゃべりやめて！早く黒板の方を見る！」

先生はもう左側を埋め尽くすほど黒板を書いていた。

急いでシャーペンを走らせて、ノートに書き記し始める。

「あーもうやってられねえーよ」

ふと目の前の席の坂本がペン回しをしながらぼけーとしていた。先生の説明の声の方がデカかったから、声は聞こえてなかっただろつ。

「なあ、澄川も面倒だと思わね？ああ、お前は優等生だったな。真面目だなー人生損だぞー」

私に答えさせる間もなく一人でベラベラ喋って、そのまま突っ伏している。

私が何か言つてやろうとした時だ。

「ちよつと喋らないでよ！聞こえないじゃん」

隣の席の浅倉さんが、確実に坂本よりも大きな声で私達に言った。何故か私を睨み、ツンとしてまた黒板に視線を戻した。

どっちも私に喋らせる隙を与えてくれないのは、新種の嫌がらせでしょうか？

これで言い返せない私も私だが、言い返したところでどうせまた「はあ？」とか言われるに違いない。

どうしてこうも世の中は理不尽なのだ！

はあつと溜息をついて、黒板に目を向けた。

今は理科の二分野をやっている。

動物の生態についてで、血管がどうか心臓がどうか先生が説明している。

生物はそれほど不得意なわけではないが、右心房・左心房、右心室・左心室だか何だかがよくわからない。

まあ今授業で聞いてなくても、テスト前にでもざーっとやればいいや……などと考えていた。

テストと言えば……ふと思い当ることがあり、斜め前の席に座っている人を見た。

白城くんだ。

学年はじめにやった統一テストで、学年一位を誇っていて森島がやたら褒めていたことがあった。

ああいう人は、テスト前に特別に勉強しなくてもきつと普段からきちんと勉強しているんだろっなあ。

今も真面目にノートを取っている彼が、とても凄い人に見える。

……って今日は白城くんのがやたら目についてるじゃないか！！

と、自分一人で手で顔を覆ったのは、言うまでもない。

## 放課後の安らぎと戦慄

放課後のことだった。

真沙美は合唱部で、放課後も練習があるので私はいつも一人で帰っている。

部活が無い人はたくさんいるが、誰かと一緒に帰ったりはしない。真沙美を含む何人か以外に、特に仲が良い人もいないのではない。

そもそもうちの学校は部活に力を入れていない。

大体目立って強いのは、野球部とサッカー部と女子バスケット部くらいだろう。

それ以外の部はヌルいところばかりで、私のように部活に入っていないくても構わないのだ。

帰ってから何をしようかなー、と考えながら一人で誰もいない教室を出た。

廊下を曲がろうとした時だった。

突然、何かに勢いよくぶつかってしまった。

「わっ！？」

「あ、ごめん！」

吃驚して声を上げてしまった。

その時よろけて体勢が崩れたけど、グツと片手を掴まれて尻もち  
はつかずに済んだ。

視点がはつきりして見上げると、じつと私を見つめる顔があった。

「大丈夫？ 澄川さん」

白城くんだ。

どうやら今日はやはり白城くん縁があるらしい。

「あ、こっちこそごめんね」

急いで謝ると、白城くんは笑った。

「今帰るところ？」

「うん。部活入ってないから」

「僕は先生に色々頼まれちゃってさー。あ、もう行かなきゃ。ま

た明日ね澄川さん」

「うん、また明日」

白城くんはじゃあね、と私とは反対方向に行った。

ぶつかって咄嗟に行動ができる彼は、さすがだなーと思った。

家の前まで来ると、車庫に白いベンツがあった。

どうやら家にいるらしい。

外観が芦屋の豪邸にしか見えないこの家。慣れないものだ。

「ただいまー」

声が家に響く。

広いホールのような玄関を通り抜けてリビングに入ると、ソファ  
に座っていた。

「お帰りー、綺貴」

華やかな笑みで迎えてれたのは、葉子さんだ。

澄川葉子。

私の叔母である。

30歳になったばかりで、スレンダーな長身の綺麗な女の人。  
私の唯一の家族。

「葉子さん、仕事は？」

「今日は早く終わったのよー！取引先との商談が早く終わったの」  
葉子さんは、雑誌でも特集されるくらい有名な化粧品会社の社長。  
長。

バリバリのキャリアウーマンだ。

「今日はケーキを買ってきたから、紅茶でも淹れるわね」  
「うん、食べる！」

5年ほど前、私の両親は交通事故にあって亡くなった。

一人になった私を引き取ったのが、お父さんの妹の葉子さんだ。  
初めこそは余所余所しかつたけれど、今はまるで親子というより  
姉妹のように仲良くしてくれる。  
私の大好きなお姉さんの存在。

「これね、私の友達のお店のケーキなのよー。美味しい？」

「うん、美味しい！」

ケーキはオーソドックスな苺のショートケーキ。生クリームが甘  
すぎず、美味しい。

葉子さんは優しく私に微笑んでいる。

まるで女神さまみたいに綺麗で素敵な人。

「学校どう？新しい学年に慣れた？」

「うん、まあ普通に」

「かつこいー男の子とかと仲良くなった？」

葉子さんはニヤニヤしながら紅茶のカップに口づける。

ちなみに紅茶は葉子さんお気に入り、アールグレイだ。薫りが  
良い。

私はちよつとムスツとする。

「男子なんて、興味ないし」

「えー、勿体ない！綺貴は可愛いし、せつかくの華の中学生なのにいい」

葉子さんは口を尖らせる。どこかお茶目で可愛い。

「真沙美ちゃんとも仲良くしてる？」

「ん、いつも通りだよ」

「真沙美ちゃん、更にお喋りになってるんじゃない？」

思わずふつと吹き出す。そう、真沙美はかなりのお喋りだ。

「もう相変わらずよ」

「女の子はみんなお喋りなもんよねえ」

どこかオバサンちつくな話し方をする葉子さん。

それでもこの温もりが好き。

「あっそう言えば夕飯の買い物してなかったのよ。今から行ってくるわね」

葉子さんはそう言っただけで席を立った。

「え、じゃあ私も」

「良いのよ、そんなの」

「じゃあ夕飯の手伝いする。あ、紅茶の片づけもしくよ」

「あらそう？ありがとうね」

葉子さんはにこっと笑って、バッグを持って「じゃあね」と手を振って家を出た。

見送った後、紅茶を飲みほしてキッチンへカップやお皿を持って行った。

片づけ終わって、自分の部屋に戻ることにした。

二階の自室に入って、部屋の中をぐるりと見渡した。

いつ見ても広い部屋だ。ざっと16畳ほどの部屋は天井が高い。

葉子さんが私を引き取った時に、不自由しないようにと色々買ってくれた。

アイアンベッドや機能的な机、天井までなる本棚。ウォークイン

クロゼット。デスクトップPC。

心から感謝しつつ、少し申し訳ない。

バッグをベッドに放り投げ、制服から私服に着替える。  
そこでケータイの電源を切っていたのに気付いた。

電源を入れた。

すると、新着メールが届いている。

送り主を見て、私は「ん？」となった。

相手はクラスメイトの、名塚理子という子だった。

一度メアドを交換しただけで、まめな連絡なんてしたことがない。  
何だろう？

珍しいことだから少し疑問に思いながらメールを開いた。

件名：無題

内容：『回ってきた』

内容はそれだけだった。

そして画像が添付されている。

画像が回ってきたということだろうか？

ファイルを開いた。

最初は何だかわからなかった。よく見て、それが何だか分かった  
瞬間、背筋が凍った。

途端、ぞわっと鳥肌が全身に立った。

内臓を抉られ、目玉の飛び出た猫の死体だ。

肉や血が、そこらじゅうに散っている有様だった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4136m/>

---

アプリコットの海

2011年10月5日05時27分発行